

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】八塚 春名

【所属】(助成決定時) 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

【研究題目】

サンダウエとハツツアの比較研究ータンザニア、コイサン語族の先住民としての過去と未来

【研究の目的】

現在、急速にグローバル化が進む状況において、先住民社会が経験している変化は、これまでにみられなかったような規模で起きている。本研究で対象とするのは、いずれも東アフリカに居住するコイサン語族のサンダウエとハツツアである。両者は、バンツー系民族が移動してくるよりもっと前から東アフリカに居住していた東アフリカの先住民であると考えられている。しかし、両者が辿ってきた歴史や今日の生活状況の違いは大きく、サンダウエは、植民地政府が介入するより以前にすでに近隣民族から農耕や牧畜を採用したと言われているが、ハツツアは、他民族や植民地政府、独立後はタンザニア政府などの定住や農耕を浸透させるような圧力を受け続けてきた社会である。本研究は、このような対照的な歴史を踏まえた両者の生計維持機構の現状を把握し、比較検討することである。それらはハツツアに関する今後の先住民運動の展開という文脈において示唆的である一方、サンダウエ研究にとっても新たな突破口になると考えている。

【研究の内容・方法】

本研究は、①サンダウエ社会とハツツア社会のこれまでの歴史的経緯の違い、②それぞれの現在の生業や社会構造に関する把握と将来の見通しについて、フィールドワークと文献による調査を用いて検討した。フィールドワークは2009年6月14日～8月3日まで、東アフリカのタンザニア共和国で行った。特に、同国北部アルーシャ州カラツ県マンゴーラと、同国中央部ドドマ州コンドリア県のサンダウエの居住地域に重点的に滞在した。タンザニアで調査に用いた言語は、主に同国公用語であるスワヒリ語を用いた。

①はまず、文献によってこれまでの両者の歴史を把握した。さらにサンダウエについては、私が2003年から実施しているサンダウエの居住地でのフィールドワークで得た資料を用いた。ハツツアについては、ハツツアのキャンプを訪れたり、周辺に居住する他民族に聞き取りを行ったりする以外にも、現地大学のハツツア研究者や先住民支援のNGO、ハツツアの居住地域において現地還元型の観光ツアーを実施する旅行会社などでインタビューを行った。②は主に、現地での参与観察とインタビューによって把握した。ハツツアについては、以前より大きな問題となっている土地問題、観光業の影響などについてのインタビューを重点的に行った。サンダウエについては、近年急速に拡大した湿地環境の利用に焦点を当てて、調査を行った。

【結論・考察】

マンゴーラ地域には、2000年代に入り、ハツツアの狩猟採集を見学することを目当てにした観光業が徐々に増え、観光業で手軽に多額の現金を稼ぎ、他民族の食糧を購入することで生計を維持しているハツツアも少なくない。しかし1950年代から他民族によって彼らの土地は農地や放牧地として利用されてきたため、ハツツアの生業の基盤である狩猟採集の場が限られている。一方サンダウエは、言語の違いによって他民族から差異視されることはしばしばあるものの、かれらは自分たちの居住地域に定住し農地を確保し、主に農耕によって生計を維持している。近年では進学率の上昇による学費の必要性や物価の高騰などに伴い、以前は未利用であった湿地に換金作物栽培を目的とする畑が開かれるようになった。しかし一方で、そのように湿地で換金作物栽培をする以外に、現金稼得手段がほとんどない。以上から、「東アフリカのコイサン語族」とひとくくりにされがちなかれらの今日の生計維持機構は大きく異なり、特に、ハツツアについては、観光業や他民族に寄りかかる以外の生計維持の手段を現代的な文脈の中で確立することの必要性が高いことが示唆された。